

戦後、GHQによって徹底された郵便検閲には「前史」が存在した。太平洋戦争中、旧日本軍は戦争遂行を目的に、国民や外国人の郵便物を検閲。思想信条や反日勢力の動向の把握に、最大限活用した。その実動部隊の一つが憲兵隊だった。

「憲兵2人で郵便局へ行き、局員や警察官と一緒に10人ほどでやった。大量の郵便物から怪しい物を抜き出し、伸ばした爪を封筒のとじ目に差し込んで開封した。開きにくいときは蒸気を当てる、糊を溶かした。」熊本市北区の元憲兵、西村美生さん(90)は「戦争に勝つためとはいえ、今思えばとんでもないこと」と述懐する。

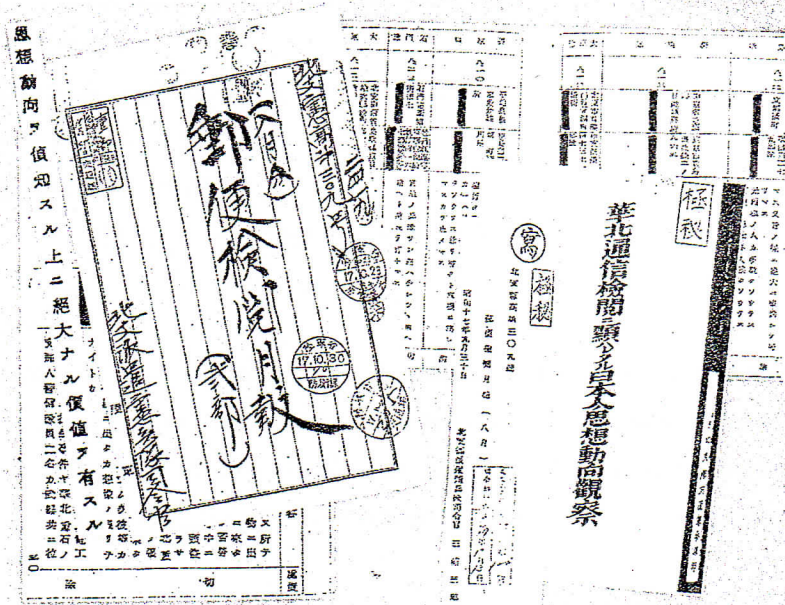
1943(昭和18)年10月、東京・中野の憲兵学校に入校。卒業後は東京憲兵隊や朝鮮半島南部の光州地区憲兵隊に配属され、郵便検閲などの任務に当たった。「検閲が終わると、とじ

国民監視

前史、担った憲兵隊

郵便検閲の真実 ④

目を元のように戻して上からアイロンをかけ、もう一度封をした。開封したことは見た目には分かりませ



憲兵による郵便検閲の報告書や検閲結果を基に日本軍がまとめた思想動向の分析資料の一部

要注意者の名簿作成も

「察勤務教程」。この中には郵便物検閲の具体的手法が記され、西村さんの実体験と重なる部分も多い。内容は、抗日共産思想や軍事機密の漏えいが疑われる郵便物を発見するための留意点など多岐にわたる。なかでも作業手順の記述は詳細だ。検閲部屋は外部から見えないようにし、通行を遮断。状況に応じて郵便局員と同じ服装で作業するよう指導する。開封時の小刀の使い方や作業姿勢、うまく開封できない時の対処法、アイロンを使って封を戻す時の注意点も教える。容疑者や要注意人物の名簿作成も指示。西村さんも光州地区憲兵隊時代に独立運動の把握に努めた。「朝鮮語の通訳を同席させ、その場で内容を訳してもらった。要注意者の名簿を作り、手紙のやりとりを継続的に調査した。検閲の結果を基に内偵もしました」。検閲の狙いは何だったのか。北支那方面軍参謀部が42年にまとめた極秘資料は「父母や親族らへの信書は不用意に心情を暴露するため、思想動向を偵知する上で絶大な価値を有する」と記す。猪飼隆明・大阪大名誉教授(日本近代史)は「検閲は軍事機密保護や治安維持のため、国民や外国人らを対象にした巧妙な監視システム」と強調する。「国民を萎縮させ、心の中まで支配しようとする国家の姿勢は、国の機密漏えいに厳罰を科す特定秘密保護法にも通じる」(鎌倉尊信)